

巻頭言 価値創造教育の時代へ—生成AIと共に歩む新たな挑戦—
 教育学習支援センター (CETL) センター長 金子 朋子……1

[WLC] WLCの取り組み……2-3

[GCP] GCPの取り組み……4

[SPACe] 2025年度春学期についてのご報告……5

[CETL] CETLの取り組み……6-7

データサイエンス教育推進センター……8

新任教職員紹介……8

価値創造教育の時代へ —生成AIと共に歩む新たな挑戦—



教育学習支援センター (CETL) センター長 金子 朋子

この度、本学がTHE世界大学ランキング2025に初めてランクインし、全国私立大学9位、「SDG4：質の高い教育をみんなに」の分野で全国私立大学1位（国内総合2位）を獲得するという快挙を成し遂げました。これは創立以来、本学の発展に尽力されてきた諸先輩方のたゆまぬ努力の賜物であり、そのご尽力に心からの敬意と感謝を申し上げます。

この歴史的な節目において、私たちの教育現場は、生成AIというかつてない技術革新の波に直面しています。その進化は目覚ましく、高等教育のあり方を根底から変えていくでしょう。教育学習支援センター (CETL) では、FD (Faculty Development) 活動を通じて教員の教育力向上の支援を続けていますが、生成AIの進化に全学的に対応するため、2025年度は新たに、「AI活用推進に関するワーキンググループ (以下、WG)」の設置が決まりました。本WGは、全学WGと学部WGに分かれ、学内でのAI活用の背景と事例の共有、ミニFDの開催、成績評価への活用提案と事例収集を目的としています。

この活動のきっかけは、日々進化を遂げる生成AIの動向と、本学が学生向けのAI利用指針を、従来の慎重な姿勢から「積極的な活用」へと舵を切ったことにあります。そこでまず、教員が抱える期待と懸念を把握するため、全学教員を対象とした緊急アンケート調査を実施しました。

アンケートの結果、多くの教員が「授業教材の作成補助」や「学生の理解促進」といった活用に高い関心を持つ一方で、「教員自身のリテラシー不足」「評価の難しさ」「ガイドラインの未整備」といった点に強い不安を感じていることがわかりました。こうした結果から、「まず教員自身が、生成AIの進化と可能性を知ることが重要だ」と考えました。

春学期の成績評価という喫緊の課題に少しでも役立ててほしいとの思いから、6月と7月の2か月間で、「基礎・応用編」と「評価編」にテーマを分け、それぞれ3回ずつ、計6回のオンライン・ミニFDを緊急開催しました。ミニFDではとても先進的で示唆に富む実践事例が共有されました。6月の「基礎・応用編」では、3回に分けて、基本

操作からNotebook LMやChatGPTを用いた教育・研究への応用までを紹介しました。研究への活用法では、研究の最新情報の短時間での収集、研究のアイデア出し、科研費の申請書や報告書の作成などが示され、研究調査力への貢献が多くの教員の興味をひきました。7月の「評価編」では、ハルシネーション等の安全性の警鐘や全学アンケート結果や授業改善サポートサービス「PASS」を利用したAI活用授業の評価、Feedback Studioを利用した学生に「考えること」を手放させない初年次ライティング指導、学生の生成AIを用いたレポート作成時の懸念に対する対策が提示されました。

また、私は8月にカリフォルニアに位置する姉妹校、アメリカ創価大学 (SUA) の学長、教務部長、教員能力向上委員会チーフ、生成AI推進リーダーらと貴重な意見交換の機会を得ました。SUAでも、リベラルアーツ教育の根幹である「書く力」「対話する力」をいかにAIと共存させ、高めていくかという真摯な議論と試行錯誤が重ねられており、同じ志を持つ仲間がいることを大変心強く感じました。

この秋からは、これまでCETLが主催してきた生成AI活用のミニFDを、各学部が主体となってそれぞれの専門分野に特化した形で実施していただきます。法学における判例研究、文学におけるテキスト分析、理工学における実験シミュレーションなど、分野ごとに最適化された活用事例や評価事例が提示されるでしょう。こうした事例に触れることで、より多くの教員が生成AIの有効性を実感し、自らの授業に取り入れる一助となることを期待しています。

とはいえ、生成AIはあくまで「手段」です。目的は、技術を使うこと自体ではなく、それを用いて「より質の高い教育を実現」し、「学生一人ひとりの可能性を最大限に引き出す」ことにこそあります。

THE世界大学ランキングへのランクインは、ゴールではなく、新たなスタートラインです。生成AIという先端技術を羅針盤の一つとして、未来を担う「価値創造の人材」が世界中に輩出される教育の時代を目指し、挑戦し続けていきます。

英国ケンブリッジ大学ランゲージセンター訪問報告

●ワールドランゲージセンター（WLC）長の尾崎秀夫准教授は、2025年度春学期在外研究のため英国ケンブリッジ大学に滞在しました。6月19日にケンブリッジ大学ランゲージセンターを訪問し、同センター長のKaren Ottewell教授と懇談しました。懇談は同センター内のメインルームで行われました（写真）。そのスペースは、ヨーロッパ言語共通参照枠（CEFR）の開発において中心的な役割を果たしたJohn TrimにちなみJohn Trimセンターと名付けられていました。John Trimは、ケンブリッジ大学でも教鞭を取った言語学者でしたが、遠く離れた日本の創価大学WLCの英語科目においてもCEFRに準拠したシラバスを整備していますので、その影響力の大きさが分かります。

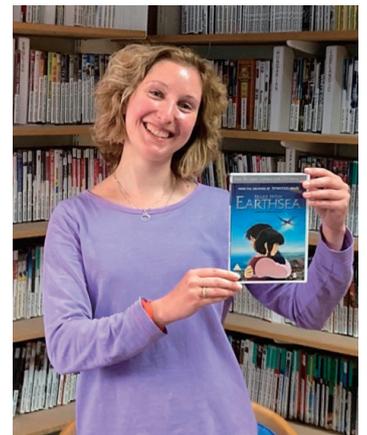
●同センター長のKaren Ottewell教授によれば、ケンブリッジ大学の約10%にあたるおよそ2,000人の学生が同センターの何らかのサービスを利用しているそうです。ケンブリッジ大学では、一部の分野を除き外国語は必修科目ではありません。それでも熱心な学生達のために豊富な資料、学習教材の提供や専門的な学習相談など手厚いサービスを提供しています。懇談ではAIなどのテクノロジーの進歩が外国語教育や学習に与える影響が話題になりました。同センター長は、テクノロジーが進歩しても外国語教育においては、

教師など人間の役割がなくなることはないとの強い信念をお持ちでした。言語の習得やその運用という人間性の根幹を成す能力の育成に、新しい技術はどんな影響を及ぼすのか、外国語教育の今後に思いを馳せました。

●世界の研究や教育を牽引するケンブリッジ大学のランゲージセンター訪問で同センターが学生の外国語能力を高めるため尽力していることを実感する機会となりました。今後も連携を取り合うことを約束し同センターをあとにしました（尾崎秀夫）。



John Trimセンターにて
Karen Ottewell教授（左）と懇談



明るく迎えて下さった
スタッフのAlina Bykovaさん

第1回タイ・モンクット王工科大学トンブリ校短期語学研修報告

●2025年2月タイ・モンクット王工科大学（King Mongkut's University of Technology Thonburi: KMUTT）トンブリ校において第1回語学研修（英語）を実施しました。この研修は、語学学習と異文化交流を通し、地球市民としての資質を育むことを目的としています。

●教室内活動：学生達は、タイと日本の類似点と相違点について考える活動に毎日参加しました。タイ人学生のバディと共に、公園、市場、寺院を訪れ、タイの文化を直接体験し、教室でタイの学生達とその経験を振り返りました。プレゼン

テーションにも取り組み、学生達の機知に富んだ洞察に多くのフィードバックが寄せられました。教室での活動は、学生達が言語スキルを効果的に活用する最適な環境となりました。また、学生達は文化に対する自分の考えを表現することを求められました。ある学生は、タイの“kreng jai”という概念が日本の「和」、つまり社会的な調和の概念に似ていることなど、両文化の類似点を強調していました。学生達は最後のプレゼンテーションにおいて、異なる文化的概念をどのように捉え、これらの経験がどのように自身を変えたかにつ



いて語りました。

●教室外活動：教室外でも、学生達は毎日英語を使いました。タイ人学生のパディと市場、モール、レストランと一緒に訪れました。さらに、地元の人々との交流は、何とか意思疎通しようと挑戦することで、学生個人の成長を促す機会になりました。学生達は、コミュニケーションを取る上で直面する課題こそが、自身の語学力を評価し、向上させる貴重な機会となることを認識していました。学生達は、コミュニティのことをより深く知るために、街の探索計画を練るよう奨励されました。このように個別に計画を立てることは、学生達の自立心を育み、文化についてより深く考える助けとなりました。

●特別活動：特別イベントへの参加により、学生達の経験はより豊かになりました。ペッチャブリーへの小旅行では、大

学がどのように地元企業を支援しているかを学びました。ヤシの木農園を訪れ、ヤシ木の育て方や、その実から美味しいスナックや飲み物を製造する方法を学びました。また、ビーチの雰囲気を楽しみ、街のお祭りにも参加しました。もう一つの小旅行は世界遺産のアユタヤでした。途中、歴史的な建造物を訪れ、有名な川沿いのレストランで食事をしました。象を見ることはできましたが、乗る時間はありませんでした。タイ旅行にタイ式マッサージは欠かせません。大学の近くには、タイ式マッサージを提供する店がいくつかありました。

●全体として、学生達は日々様々な場面で英語を使い、貴重な文化的洞察力を得て、よりグローバルな視野を持つ人材へと成長しました。研修を通し、全学生を支援して下さったKMUTTに感謝の意を表します（ポール・ホーネス）。

言語学習アドバイジング認定プログラムの開始

●2025年度より、スピーキングテスト対策と英語学習アドバイジングサービスが統合され、「英語学習相談コーナー」という1つのプログラムになりました。スピーキングテスト対策は、IELTSとTOEFLのスピーキングテスト対策を支援し、アドバイジングサービスは、自律学習のためのガイダンスとサポートを提供します。この統合は、少人数体制でも学生のためにより多くのサービスを提供できるという実用的な選択であると同時に、合理性という点においても適切と考えた結果です。

●これに携わる助教を支援するため、言語学習アドバイジング認定プログラム（Advising in Language Learning Certification Program）を開発しました。このプログラムは2年に渡り行われ、言語学習アドバイジングに関する理論と研究の指導、アドバイジングのトレーニングを提供します。日々のアドバイジングセッションに直接活かせる知識やスキルを得られることに加え、このトレーニングは助教の将来の言語教育キャリアにとって価値あるものです。助教にとっては、このプログラムを修了したことを履歴書に含めることも可能であると確信しています。

●このプログラムは、専門性と柔軟性のバランスが取れるよ

う設計されています。まず、2つの基礎セッションから始まり、1つは言語学習におけるアドバイジングの原則と実践に、もう1つはIELTSおよびTOEFLスピーキングテスト対策に焦点を当てます。その後、2年間にわたって8つのセッションが実施されます。

●各セッションは、学期内の過去の研修を基に構築されますが、プログラムは意図的にモジュール化されています。これにより、カリキュラムの整合性を損なうことなく、新しい助教を毎学期受け入れることができます。アドバイジングに重点を置いたセッションでは、参加者は実践と理論の両方に取り組みます。実践には、効果的な学生との交流、共感の醸成、そして包括的かつ生涯にわたる学習の支援のための方略が含まれます。理論では、学習者の自律性、社会文化理論、認知科学の要素、自己決定理論を紹介し、これらの視点を統合することで、このプログラムは助教が個々の学習者をどのように支援するかだけでなく、言語発達の基盤となるより広範な認知・社会プロセスについても深く考えることを促します。このプログラムの開発と運営が、学生の語学学習支援の体制の更なる強化につながることを願っています（ブライアン・ブシュナー）。

■WLC 教員の紹介

マリ・クロマツ講師



マリ・クロマツ講師は、WLCセルフアクセスセンターのコーディネーターです。ニューヨーク市で生まれ、高校までニューヨーク市郊外に住んでいました。国際基督教大学で社会科学の学士号、コロンビア大学ティーチャーズ・カレッジでTESOLの修士号を取得しています。

2007年から日本の大学で専任講師を務めており、立命館アジア太平洋大学、立教大学、国際基督教大学、成蹊大学で教鞭を取りました。クロマツ講師の研究対象は、基礎レベルの学生への英語教育と、日本の大学生の外国や文化への好奇心

です。クロマツ講師は創価大学で特に基礎レベルの学生を教えることに喜びを感じています。学生たちの自信、特にスピーキング力の向上を支援し、「英語は嫌い」という思いを「英語はそんなに悪くない」という気持ちに変えていくことに、大きなやりがいを見出しています。クロマツ講師が工夫していることは、パートナーを変えて、学生に繰り返しスピーキング活動に取り組んでもらうことです。その結果、学生は流暢になり、徐々に自信をつけていくのです。クロマツ講師の目標の一つは、大学在学中、学生がキャンパス内やアルバイトなどの日常的な場面で、外国人と英語を使う自信を身につけるようにすることです。

GCPディレクター 教授 佐々木 諭

GCP16期生23名が選抜に合格

世界市民の育成をめざす学部横断型選抜プログラム「グローバル・シティズンシップ・プログラム（以下、GCP）」に、2025年度は23名の学生が選抜されました。GCPは2年間にわたる正課集中プログラムで、高度な英語実践力、論理的思考力、課題解決力、そしてデータサイエンス力を養うことを目的としています。

今年度の選抜は、書類審査による一次選抜、さらに英語ライティング・小論文・面接試験を通じた二次選抜を経て行われ、23名がGCP16期生として新たに仲間入りしました。その中には、昨年度から新たに導入された「グローバル人材育成入試（GCP型選抜）」の合格者も含まれています。

GCP生は、学部の授業に加えGCP独自の高度な課題にも挑みます。同期との切磋琢磨や先輩からの温かなサポートを受けながら、春学期のGCP科目を無事に修了。秋学期からは、さらに高い目標に向けて日々挑戦を続けています。

第20回GCP総会を開催

GCPは毎年5月と11月に総会を開催しています。総会では、在學生と卒業生がGCPでの学びの成果や卒業後のキャリアを報告し、それぞれの目標に向けた挑戦の決意を深める場となっています。また、総会前後には卒業生と在學生による懇談会も行われ、卒業生が在學生の就職や進学の相談に応じています。

記念すべき第20回GCP総会は、5月3日（土）に鈴木美華学長、田代康則前理事長の参加のもと、対面とオンラインにより開催されました。総会では在學生3名、卒業生2名が活動報告を行いました。

1年生の児島理恵さん（法学部）は、創価大学の教育理念「人々の幸福と世界の平和の実現に貢献する『創造的人間』を目指す」に惹かれ、世界の平和に貢献できる人材に成長できると確信して入学を決意。将来は紛争解決や平和構築、難民問題の解決など、世界を舞台に活躍するこ



児島さん

とを目標に掲げ、GCPで切磋琢磨しながら勉学に挑戦する決意を示しました。

2年生の中平広美さん（教育学部）は、春季休暇にマレーシアで環境保全ボランティアに参加。現地では英語の通訳を頼まれることもあり、GCPで培った英語力を実践の場で発揮できた喜びを語っています。

4年生の石上諒さん（理工学部）は、交換留学先のナミュール大学よりオンラインで参加。留学先では国際政治や大学院レベルの開発経済学、計量経済学を履修し、卒業後はアメリカの大学院で経済学を専攻することを目標に挑戦しています。また、学外活動として日米学生会議に参加し、日米の優秀な学生と対等に議論できた経験が自信につながったと述べています。

卒業生の報告では、GCP1期生の大川絵里さんとGCP2期生の黒川真紀さんが登壇。大川さんはEU主催のErasmus Mundus Joint Degree Programに合格し、現在デンマークのオーフス大学大学院でジャーナリズム理論を学んでいます。10月からはドイツ・ミュンヘン大学でクロスボーダージャーナリズムを学ぶ予定で、将来は国際機関の広報専門家として、言論の力で平和に貢献することを目指しています。

黒川さんは法学部卒業後、創価大学法科大学院に進学し司法試験に合格。弁護士として経験を積みながら、大学入学時の目標であったアメリカのロースクール進学に挑戦し、ジョージワシントン大学ロースクールへの進学が決まっています。将来的には、アメリカの司法試験合格を経て、世界を視野に人々の尊厳を守る法曹スペシャリストとして活躍することを誓っています。

最後に、鈴木学長と田代前理事長からGCP生への大いなる期待が語られ、勉学への挑戦を励まされました。

GCP14期生が派遣留学に出発

GCP2年のプログラムを終了したGCP生が、派遣留学先に出発しました。14期生23名は、アメリカをはじめイギリス、ノルウェー、イタリアなどの欧米や、アジア、アフリカの16か国20大学の大学間交換留学や学部派遣留学に合格。留学での学びは、GCP生にとって世界市民としての礎となる貴重な経験となることが期待されます。





2025年度春学期についてのご報告

2025年春学期のSPACeのサービスは、基本的に対面で（一部オンラインを併用）行いました。
以下、各部門の秋学期の利用者統計を報告します。

ヘルプデスク

■表1 2025年度春学期 Help Desk利用者（件）

	4月	5月	6月	7月	合計
予約	17	27	29	28	101
飛び入り	91	40	17	8	156
合計	108	67	46	36	257

■表2 2025年度春学期 学習セミナー参加者（人）

No.	実施日	セミナー	参加者
1	4/30 5/2	学術文章作法セミナー	24
2	6/11	TOEICセミナー	27
3	7/11	知って得する海外生活セミナー	5
合計			56

日本語ライティングセンター

■表3 2025年度春学期 JWC利用者（件）

	4月	5月	6月	7月	合計	%
チュータリング（実施数）	12	118	76	116	322	62.5
レポート診断	3	69	13	108	193	37.5
合計	15	187	89	224	515	100.0

■表4 2025年度春学期 JWCセミナー参加者（人）

No.	実施日	セミナー	主催	参加者
1	5/7	レポートお助け隊	JWC	18
2	5/9	文献検索セミナー【導入編】	SPACeレファレンス・図書館・JWC連携	6
3	5/21	ブッククラブ『注文の多い料理店』	図書館・JWC連携	12
4	6/13	文献検索セミナー【実践編】	SPACeレファレンス・図書館・JWC連携	9
5	6/17	レポートお助け隊	JWC	12
6	7/29	絵本ブッククラブ	図書館・JWC連携	7
			合計	64

調べごと相談

■表5 2025年度春学期 SPACe 調べごと相談「レファレンス」利用者（件）

	4月	5月	6月	7月	合計	%
学術文章作法	2	3	16	11	32	76.2
演習（卒論）	2	1	1	1	5	11.9
その他	3	0	1	1	5	11.9
合計	7	4	18	13	42	100.0

教育・学習支援センター（CETL）は、学士課程教育機構の教育支援組織として、FD・SD委員会や教務課と連携し、教員の教育改善・自己研鑽を支援するための多様なFD・SDイベントを企画・運営しています。近年、生成AIの急速な進化によって、大学教育のあり方の見直しが迫られています。2025年度のCETLの活動では、この課題に応える生成AI活用に関するイベントに注力しつつ、数多くのプログラムを実施しました。以下は、2025年度上半期の活動報告です。

特集

生成AI活用推進ミニFDの開催

CETLでは、全6回にわたる「生成AI活用推進ミニFD（全てZoom開催）」シリーズを実施しました。このシリーズは教員の多様なニーズに応えるため、段階的なプログラムとして設計されました。シリーズは好評であり、多い時には90名を超えるほどの教職員がミニFDへ参加しました。参加者からは「活用事例が良く理解でき、大変有意義でした。実例を用いて紹介してくださったので、用途が分かりやすく、授業の導入にあたり具体的なイメージが湧いてきました。」

「NotebookLMやポッドキャスト形式での音声概要生成、Genspark、Napkinといったツールは知らなかったのですが、非常に参考になりました。」といった声が続々と届けられ、学内における生成AI活用の機運を大きく高めました。詳細は下記の通りです。

■ 生成AI活用推進ミニFD初級編

6月19日（木）に総合学習支援オフィスの石橋部長による第1回生成AI「初級編」が開催されました。まず生成AIを用いてテキストや写真から動画を容易に生成できるという現状が実演を交えて説明されました。続いて、学内で利用可能な生成AIツール、目的に応じたツールの使い分け、著作権などの注意点、そして授業や校務ですぐに使える具体的な活用例とその実際の指示例（プロンプト）が紹介されました。これから活用を始めたい教員にとって不可欠な知識が丁寧に解説されました。

■ 生成AI活用推進ミニFD応用編（教育活用／研究活用）

6月27日（金）には、井田副学長による「応用編（教育活用）」と「応用編（研究活用）」が連続で開催されました。教育活用では、講義資料の情報を基に音声概要やクイズを作成する「NotebookLM」の活用法、文章から概念図を作る「Napkin AI」、エージェント型AIの「Genspark」の事例まで、授業をより魅力的なものに変えるための具体的なツールと活用方法が紹介されました。

研究活用では、大学院生の指導にも活用可能な多彩な

AIツールと論文執筆や情報収集を効率化する実践テクニックを紹介しました。また、参加者は入力した情報がAIの学習データとして使われないようにするための具体的な設定方法を学ぶことができ、研究倫理を遵守しながら安全にAIを活用するための知識を得ることができました。

■ 生成AI活用推進ミニFD評価編

7月には、より実践的な課題を探る「評価編」が開催されました。16日の第1部では、金子センター長が「生成AIと安全性」をテーマにして登壇されました。前半ではAIが文章を生成する仕組みにまで踏み込み、AIが誤情報を生成する「ハルシネーション」のリスクを解説しました。後半では学内で実施した学生・教員への活用状況アンケートの結果を報告しました。

続く第2部では、鈴木道代准教授が「学生に『考えること』を手放させない初年次ライティング指導」と題して学生のAI利用に関する現状と対策を報告しました。講演では剽窃チェックツール「Feedback Studio」の新機能であるAI検知機能の利用方法と注意事項が紹介され、AIの利用を禁止するのではなく、その特性を理解した上で教育にどう活かすかという建設的な議論を展開しました。

17日の第3部では、小島副センター長が、学生がレポート作成において、思考や分析といった「プロセス」そのものをAIに委ねてしまう「思考プロセスの外部化」という課題を提起しました。その対策として、AIが段階的なヒントを提供して学生を導く「ガードレール付き」のAIチューターの活用や、学生に思考の外部化をさせない動機付け方法の導入が紹介されました。

CETL主催生成AI活用推進ミニFD 評価編(3)

レポート作成時の学生の生成AI利用対策

2025年7月17日 ミニFD
CETL副センター長
経済学部 准教授 小島健

CETL 勉強会 / 新任教員研修

■ CETL 勉強会「大学のグローバル化とグローバル人材育成について」

4月17日(木)(16:45~18:15)、UCL(ユニバーシティ・カレッジ・ロンドン)より大沼信一教授を講師としてお招きし、「大学のグローバル化とグローバル人材育成について」と題した勉強会が開催されました。本勉強会には52名の教職員が参加しました。講演では、過去30年間の日本が世界のグローバル化の潮流に十分適応できず、経済の長期停滞や大学の国際的評価の低下を招いたとの指摘がありました。その上で、日本が同様の局面に直面していた約200年前の江戸時代終期に、英国、特にUCLとの繋がりを通じて日本が困難を克服し、飛躍的な発展を遂げたという歴史を振り返り、現代の大学教育改革とグローバル人材を育成するために必要な視点が提供されました。



■ 授業設計基礎Ⅰ / CETL 勉強会

4月26日(土)(10:00~16:00)には、関田一彦副学長による「授業設計基礎Ⅰ」が開催され、13名の教員が参加しました。「研修を重ねる中で、多くの気づきがあり、とても良かったです。他分野の先生方の視点や経験を知ることができたのも非常に有意義でした。」など、自身の授業を振り返り、新たな視点を得られたとの声が多く聞かれました。

■ カリキュラムコーディネーター入門研修 / CETL 勉強会

5月10日(土)と11日(日)の2日間にわたり、愛媛大学より中井俊樹教授と上月翔太講師をお招きし、「カリキュラムコーディネーター入門研修」をオンライン形式で実施しました。新任教員研修も兼ねたこの研修には27名が参加しました。参加者からは、「カリキュラムの特徴および編成に関する理解が非常に増えました。」といった感想が寄せられました。

■ 簡易版ティーチング・ポートフォリオメンター研修 / CETL 勉強会

7月24日(木)、関田一彦副学長を講師に迎え、「簡易版ティーチング・ポートフォリオメンター研修」が開催され、7名の教職員が参加しました。この研修では、作者を支援する「メンター」に求められる役割や心構え、効果的な面談の進め方について理解を深めました。

■ 授業設計基礎Ⅱ / CETL 勉強会

7月26日(土)には、「授業設計基礎Ⅰ」の続編として、関田一彦副学長による「授業設計基礎Ⅱ」が開催され、16名の教員が参加しました。参加者からは、「シラバスの書き方や授業の内容を見直すために必要なことが分かったのが、大変有り難かったです。秋学期の授業に向けて、早速取り組んでいきたいと思います。」といった声が寄せられました。

■ 第1回新任教員スタートアップセミナー

4月19日(土)、新任教員を対象に、関田一彦副学長と西田哲史教務部長による「第1回新任教員スタートアップセミナー」が開催され、15名の新任教員が参加しました。参加者からは、「深刻化する少子化の中、ユニバーサル時代の高等教育の在り方と課題について考えていかなければならないことが多くあると改めて思いました。」などの声が寄せられ、新学期を迎える準備ができたようでした。



■ 第2回新任教員スタートアップセミナー

7月26日(土)、新任教員を対象に、「第2回新任教員スタートアップセミナー」が開催され、新任教員を代表して、山本和弘 法学部 講師、李丹 文学部 准教授による授業実践報告がありました。これには15名の新任教員が参加しました。参加者からは、「先生方のご意見を聞く機会は貴重なのでよかったです。新任の先生方のお話なので、自分と同じような疑問や悩みについて違う角度からの捉え方を伺えてよかったです。」などの声が寄せられ、秋学期へ向けて新たな知見を得られたようでした。

今後のAI教育のあり方について

■ データサイエンス教育推進センター長 浅井 学

■ 現代社会は、AI(人工知能)技術の急速な発展により、私たちの生活、経済、そして社会のあり方そのものが大きく変化しており、今後もその傾向は続いて行くと思われる。AIはもはや特定の専門分野に留まらず、あらゆる産業、あらゆる職種において、その基礎的な知識と適切な活用能力が求められる時代となりました。このような背景から、学生が卒業後にどのような道に進むとしても、AIを正しく理解し、安全かつ倫理的に活用できる能力を身につけることが極めて重要となっています。

■ 第一に、AI教育の基盤として必要なのは「リテラシー教育」と言えます。AIの仕組みを数学的に深く理解する以前に、まずは一般の学習者がAIの長所と限界、さらには倫理的問題を正しく認識できるようにすることが重要と言えます。例えば、生成AIが提供する情報には誤りが含まれる可能性があること、学習データに基づく偏りが社会的不平等を助長し得ることなどを、早い段階から学習しておくべきです。こうしたAIリテラシーは、プログラミングスキルに先立つ「世界市民としての基礎力」と位置づけることができます。本学では、1年次の必修科目「データサイエンス入門」で学ぶことができます。

■ 第二に、AI教育は実践的でなければならないと言えます。理論だけではなく、実際にAIツールを使い、試行錯誤しながら活用法を学ぶことが不可欠です。例えば、データ分析や自然言語処理を題材としたプロジェクト型学習を取り入れることで、社会課題に即した実践的能力を育成できると期待されます。特に、現場の問題を解決する体験を通して、AIの可能性と限界を体感することが教育効果を高めていきます。例えば、本学の共通科目「データサイエンス演習B：アクセンチュア後援」では、アクセンチュアでデータサイエンティストとして活躍する卒業生から、最先端のAIについて実践的に学ぶだけでなく、実データを使ったプロジェクト型学習を通して学ぶことができます。どの学部の学生でも学べるように共通科目に配置されていますが、専門科目と同様に高度なレベルの内容となっています。

■ さらに、AI教育には「教員側の準備」も欠かせません。現状では多くの教員がAIに不慣れであり、教育現場で十分に活用できているとは言い難い状況です。教員自身がAIツールを自在に使いこなせるようにする必要があります。今年の春学期にCETLの「生成AI活用推進ミニFD」がいくつか開催されましたが、多くの教員が関心をもって参加していました。現在は技術的な知識が中心となっていますが、AIの活用における倫理的判断力や学生の自主性を尊重する教育方法についての検討が必要です。AIを「禁止する対象」として扱うのではなく、適切に「共に使う対象」として扱えるようにすることが、教育現場における健全なAI利用につながります。本学の多くの教員はそのような問題意識を持っているので、現場の効果的な活用方法をシェアしていくなかで、適切な指導法が生まれていくと期待されます。

■ 最後に、AI教育の方向性を考える上で重要なのは「人間らしさの涵養」と考えられます。AIが多くの作業を代替する社会において、人間に求められるのは創造性、批判的思考力、他者との協働能力といったスキルです。AI教育の最終的な目的は、AIそのものの習得ではなく、AIを活用しながら人間がより人間らしく成長できる環境を整えることにあります。今後の教育の現場では、AIに任せる部分と人間が担うべき部分を峻別して、AIを道具として賢明に使いこなす力を養う必要ができています。

■ 以上のように、今後のAI教育は①リテラシーの確立、②実践的学習の推進、③教員研修の充実、④人間らしさの涵養という4つの軸が重要と考えられます。AIが社会の基盤技術となる時代において、本学の卒業生が「創造的人間」として存分に力を発揮していけるように、データサイエンス教育推進センターとして本学のAI教育の充実化に取り組んで参ります。

学士課程教育機構 新任教職員紹介

SPACe 助教	高萩 智也
WLC 助教	ナリマツ・デ・ブリト・モラエス・ヤスミン・チエミ
WLC 助教	ウィリアム・デーナ・ウールストン



創価大学

創価大学学士課程教育機構ニュースレター [SEED] 第30号
発行日 2025年10月2日
発行者 創価大学学士課程教育機構
〒192-8577 東京都八王子市丹木町1-236
<https://www.soka.ac.jp/seed/>

